

青果物輸入の南九、調達先広げ業務用開拓（個性派企業ファイル）

2017/11/10 1:59 | 日本経済新聞 電子版

鹿児島県鹿屋市に本社を置く南九は中国など世界各地からの青果物輸入を軸に業績を伸ばしている。東京商工リサーチ鹿児島支店によると2016年度の県内での売上高上位100社中、増収率が4番目に大きかった。山下伸也社長（45）が国際貿易拠点である福岡市に常駐し、父親で創業者の幸一会長（69）は本社に陣取ってメガソーラー事業などを手掛ける。それぞれの立地特性を生かした「二眼レフ経営」が特徴だ。

博多港のコンテナ物流の中核「アイランドシティ」。福岡市中央卸売市場青果市場の近くで「南九貿易物流センター」が3月に稼働した。3年前から社長を務める伸也氏肝煎りの戦略拠点だ。総投資額は約16億円。市内2カ所の賃借物件に分散していた物流機能を1カ所の自社物件に集約し事業効率を高めた。保税対応なので通関もスムーズだ。

4つの温度帯の冷蔵倉庫を備え、日本を含む17カ国・地域の野菜や果物を扱う。その数40種類以上。10月中旬に同センターを訪れると中国産ゴボウや米国産ブドウ、オランダ産パプリカ、メキシコ産アボカドなどの箱が並んでいた。「外食・中食など業務用のニーズに一通りこたえられる」と伸也氏は胸を張る。

南九の売上高は17年3月期で94億4千万円。前の期より約2割増えた。台風に伴う青果物価格の上昇を押し上げ要因だとし、18年3月期は85億～90億円と堅く見積もる。100億円の節目に「特段のこだわりはない」（幸一氏）とするが、1つの目標でもある。

同社は1980年に「南九州資材」として設立。3年前に現社名に変更した。幸一氏は最初に勤めた百貨店を振り出しに野菜販売を長く経験。同社でも農業用の包装材や省力機器を扱いながら地元農家に根菜類の生産を委託した。より大量かつ安定した生産が可能な耕地を求めて中国へ。93年にゴボウの自社栽培を決断し94年から輸入を始めた。

伸也氏は幸一氏の勧めで90年代半ばに大連へ語学留学。野菜の生産現場にも足を運んだ。「生活が豊かになったと農家が喜んでくれる。そんな仕事を自分もしたい」。卸での修業を経て家業に参加。福岡事業を一から立ち上げた。98年設立の福岡営業所は2004年に福岡貿易部、4月から福岡貿易本部へと発展した。

逆風も体験した。08年に発覚した毒入りギョーザ事件がきっかけで中国産食品を敬遠する動きが広まったのだ。当時の同社は中国産青果物への依存度が約50%。そこで他国・地域からの調達を増やし、



山下社長は福岡市に常駐し、青果物の輸出入を統括（福岡市の南九貿易物流センター）

06年から扱う輸入果物の品目も拡充した。並行して最終的な供給先もスーパーなど小売業から業務用へ移行。3年ほどで成長軌道に戻した。

今後は輸出拡大も視野にあり、4月から鹿児島グリーン事業本部を兼ねる本社が県産農産物の輸出を後押しする。鹿児島では新エネルギー事業での地域貢献も目指す。最初の太陽光発電所は13年に稼働し現在の合計出力は約2万キロワット。5年後に3万5千キロワット体制をめざす。「理想は生涯現役」（幸一氏）。伸也氏との二人三脚は当面続きそうだ。

（鹿児島支局長 松尾哲司）

本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は、日本経済新聞社またはその情報提供者に帰属します。また、本サービスに掲載の記事・写真等の無断複製・転載を禁じます。

Nikkei Inc. No reproduction without permission. 許諾番号30065896